

文学・芸術から読み解くハンセン病

大谷真史 鈴木朱実 望月幸樹 善方美沙季

杏林大学医学部1年「地域体験学習」

概要と目的

ハンセン病は「らい菌」という細菌に感染することで引き起こされる感染症の一種である¹⁾。現在は治療法が確立されているが、当時は、ハンセン病は「恐ろしい伝染病である」という誤った認識が広まっていた。それにより、「患者の強制隔離」といった国の間違ったハンセン病対策がなされ、患者、回復者およびその家族の方々の人権が、長期にわたり侵害されて偏見差別にさらされたという過去がある²⁾。

そこで、私たちは、国立療養所多磨全生園（以下、療養所）、および国立ハンセン病資料館（以下、資料館）を訪問し、展示されている作品から生の声を感じ取り、彼らが自身の作品を通して何を訴えているのかを探ることを目標に据えた。

方法

本研究ではまず、療養所と資料館展示でのフィールドワークを行い、ハンセン病患者の方が残した作品に直接触れた。マインドマップ（図1）を作成して情報を整理することで、そこで得た気づきをグループで共有し、考えを深掘りする議論を行った。議論の内容を踏まえて作品のもつメッセージや当時の社会状況への理解を示すとともに、私たちの認識に生じた変化を反映させた3分間スピーチを作成し、本研究のまとめとした。



図1 私たちが作成したマインドマップ

結果と考察

私たちはハンセン病患者の作品を通して、「芸術品の持つ人間の根源的な生命力」を感じ、「私たちが無自覚のうちに持つ偏見」に気づかされた。当初、私たちは「ハンセン病患者のやるせない思い、悲痛な叫びを作品から汲み取ろう」という先入観を持ったままフィールドワークに臨んでいた。つまり、作品には、入居者の方たちが自分たちの置かれた状況を悲観的に捉えた、ある種のニヒリズム的な雰囲気漂っているものだと覚悟していた。しかし実際は、彼らは決して自分の人生に絶望して悲観的になるのではなく、故郷や家族への思いなど、日常の中にある心の動きや希望の一端をなんとか掴もうとしていた。そして、私たちが想定していた、彼らの中のニヒリズム的な部分はむしろ最も憎んでいたのではないかとさえ思った。

「私たちの意識には彼らへの同情や先入観が無自覚のうちにあって、それが彼らにとって最も鼻もちならないことなのではないか」と考えるきっかけとなったのは、北条民雄が療養所で生活をしていて書いた次の日記の一節である。

私をして死を思わしめるものは、人より受ける同情である。同情！これほどたまらないものが他にあるだろうか。同情されるとは何か。それは同情されねばならんほど自分が無価値で、無意義な存在を証明するものだ。これが俺にはたまらんだ³⁾。

この日記を読んだことで、私たちの意識には彼らへの同情や先入観が無自覚のうちにあり、それが彼らにとって最も鼻もちならないことなのではないかと感じてハッとさせられた。

こうした作品と直接向き合い、当事者の生の声に触れる体験を通じて、単なる情報や知識の収集だけでは得られない

い深い学びを得た。

【指導教員】 医学部医学教育学 助教 三枝七都子

参考文献

- 1) 国立ハンセン病資料館（更新日不明），ハンセン病について，<https://www.nhdm.jp/about/disease/>，2025年3月9日閲覧
- 2) 国立ハンセン病資料館，ハンセン病問題について，<https://www.nhdm.jp/about/issue/>，2025年3月9日閲覧
- 3) 北条民雄. 1937年2月4日北条民雄の日記